

健康づくり・スポーツ推進特別委員会行政視察概要

1 視察月日 令和元年8月5日（月）～8月6日（火）

2 視察先及び視察事項

（1）福岡県福岡市

福岡市総合体育館について

（2）株式会社KDS熊本ドライビングスクール（熊本県熊本市）

KDS健康経営プロジェクトについて

※株式会社KDS熊本ドライビングスクールの視察については、荒天に伴う視察行程の変更により中止した。

3 視察委員

委員 木内 秀一

同 福島 直子

視察概要

1 視察先

福岡県福岡市

2 視察月日

8月5日（月）

3 対応者

市民局スポーツ推進部スポーツ施設課主査（説明）

4 視察内容

（1）福岡市総合体育館について

ア 整備事業の経緯

福岡市では、市内の拠点的体育施設の一つとして、1964年に九電が中央区に建設した九電記念体育館を使用してきた。同館は2003年に建物のみ九州電力より福岡市に譲渡されたが、土地借用の期限が満了することから、これに代わる体育館を東区の福岡アイランドシティー内に移転整備することとした。

新規体育館は民間資金等の活用による公共施設等の整備等の促進に関する法律に基づいてPFIのBTO方式で整備。清水建設株式会社を中心とした7社からなるSPCが受注した。契約期間は2016年2月23日から2034年3月31日までの約18年間。契約金額は税込148億1966万7237円である。

イ 整備にあたっての課題

- ・九電記念体育館は交通至便な中央区に位置していたが、東区は再開発地区であり公共交通はバス便のみである。
- ・事業計画当初からネーミングライツを前提として進めてきたが、新規整備でありながら企業名が全面に出ることに市民から抵抗感を示された。
- ・休日の大会では500台分用意した附属の駐車場では不足するため、隣接の港湾局用地を臨時駐車場として使用している。周辺開発が進んだ時点での土地活用の方向性も含め、今後の対応をどうするかが課題として浮上した。
- ・メインアリーナの壁は演出効果を狙って黒を基調とし、当館を拠点とするプロバスケットボールチームの興行演出でも好評を得て

いる。一方、サブアリーナの壁を白くすることでメインアリーナとの視覚的差別化を図ったが、観客から「球が見えにくい」との苦情が出てしまった。

- ・動線や階層を示すサインは設計者とも十分協議したつもりだったが利用者からわかりづらいとの声が出てしまった。

ウ 質疑概要

Q 建設後50年以上を経たこれまでの体育館との違いは何か。

A この50年でスポーツは大きく変わった。競技種目の多様化やプロ化が進展した。これらに伴い、附帯設備の多様化、プロ選手と観客との動線の工夫、またLGBTの方への配慮などが必要となった。

また、スポーツを「みる」ことができる施設という視点で、高水準の照明環境を備えたエキサイティングアリーナを実現するなど設計に工夫を凝らした。

Q 供用開始した平成30年12月から3月末の間の利用者数と今後の取り組みはどのようなことを予定しているか。

A 現状は5万463人。今後年間30万人の利用を目指している。

情報提供は管理運営を行う美津濃株式会社が管理するホームページと、当館のみで配布している広報誌で行っているが、貸館利用の空室状況や有料教室の利用状況などをよりわかりやすくするためホームページの充実を求めていく。さらに、来館のための公共交通の充実が必要であり、周辺開発の中で間もなく完成する道路網の利用に期待している。

Q 市民の健康づくりにおける当館の役割は何か。また、区役所との連携をしているか。

A 福岡市では各区に設置された身近な体育館を中心に区民の健康増進を図ることとしており、当館のような拠点施設とは役割を分担している形となっている。トレーニングルーム、武道場、弓道場は比較的近隣に在住する市民の利用が多い。

また、障害のある市民も運動や観戦を楽しめる施設になっていることが大きな特徴でもある。

(2) 委員所見

本特別委員会の本年のテーマである「ラグビーワールドカップ2019[™]、東京2020オリンピック・パラリンピック等のスポーツイベントを契機とした日常の健康づくり」に即した調査研究を行うため、大型国際

イベントを経験した都市に事例を求めようとしたが、訪問時期の調整もあり、本年4月に供用開始された福岡市総合体育館における市民利用とスポーツの課題を調査する形となった。

今や地方自治体におけるハード整備の常道となりつつあるPFI（BOT）方式による施設整備は、市民ニーズに柔軟に応えるために適した方法だということは福岡市総合体育館の施設内容を視察して感じられることではあった。一方、設計から施工・運営までを包括しての契約となることから、発注者である自治体の、例えば「市民の健康づくりへの貢献」といった政策的意図の実現には明確な指標を確認し続けるなどの工夫が必要となると感じた。

横浜市では、建設・供用開始後50年以上経過した横浜文化体育館を既成市街地であるJR関内駅前の現在地で建てかえる。今後、事業計画通り「関内・関外地区のまちづくり」の中で、スポーツによる活性化の核となることを期待している。福岡市総合体育館も福岡アイランドシティーという、成長著しい福岡市の臨海部再開発における中核施設の一つである。アジアのハブシティーを目指す福岡市の発展とともに増す今後の存在感に注目したい。

ただ、前述のとおり整備にあたっての課題は現在進行形の課題も残存しているものの、建物外観のデザインはモダンでフルカラーLED照明による演出も可能であり、館内のメインアリーナも高揚感・臨場感を高めるデザインで選手を間近に感じる空間となっているなど、スポーツを楽しく「みる」という視点ではとても興味の引かれる構造になっている。

また、渋滞を少しでも軽減させるようなトイレの斬新な構造、お子様連れの利用者に対するキッズルームの設置、車イス利用者に配慮した設計等々、館内施設の至る所で多様化する利用者に優しい設計が施されている点は非常に参考となるものであった。



(福岡市総合体育館内会議室での説明聴取及び質疑)